

# 宣教師 Mary Anna Holbrook と神戸女学院1894年「ある日本化運動」

－同志社との緊張関係を踏まえて－

三木 恵里子

## 1 はじめに

### 1) 課題と目的

いわゆる欧化政策時代の終焉、1890年の教育勅語発布、そして国家主義・国粹主義の台頭—そのような「反動」が、日本の19世紀末から20世紀初めのミッション・スクール苦難の理由だとされてきた。しかし、大きな時代の流れはそうであるにせよ、宣教師派遣元によって、地域によって、個々のミッション・スクールによって、事情は異なるであろう。

少なくとも American Board<sup>1</sup> (以下、アメリカン・ボード) が関わっていた京都の同志社では、何よりも、1890年1月23日、日本人であり準宣教師でもある新島襄が死去したことが大きかった。新島死去の混乱の中、新島より数日前に家族を亡くした同志社教員が、同じく同志社病院で娘を亡くした同志社支援者とともに、同志社病院女性医師の Sara Craig Buckley<sup>2</sup> (以下、バックリー) の医療上の過失を訴えたということがあった<sup>3</sup>。その後、同志社は京都看病婦学校・同志社病院長のポストを、宣教師から、当時の同志社の中心人物らと懇意の医師に渡した。また、同志社は、それをはじめとする事柄を問題視したアメリカン・ボードと1896年に決裂し、それ以降同志社を日本人のみが運営する学校とした。この一連は同志社だけで完結することではない。アメリカン・ボードが神戸で運営し、新島襄が日本人として土地などの資産の名義人となっていたミッション・スクールである神戸女学院にも大きな影響があったはずである。

日清戦争が起こった1894年の11月、神戸女学院の日本人教員有志が、院長・会計・設立者の名義を日本人にせよ、と学校に要求した。神戸女学院の年史は、このできごとを「ある日本化運動」と名付ける。本稿は、この神戸女学院における「ある日本化運動」の意味について、新島襄の死去と新島死去後に同志社中心人物らが神戸女学院に与えた影響、また、同志社関係者が唱えた「新神学」の影響を考慮しながら、主に神戸女学院の女性宣教師教員・Mary Anna Holbrook (1854–1910、以下、ホルブルック) のアメリカン・ボード本部への書簡に基づいて検討する。次節では先行研究を整理し、第二章ではこのできごとまでのホルブルックについて詳述する。第三章では、それらを踏まえた上で、ホルブルックの書簡などから、神戸女学院の土地名義人問題や「新神学」への危機感を読み取る。

なお、ホルブルックの書簡については、すべて佐伯裕加恵「ホルブルック書簡—印字化および註—」<sup>4</sup>を用いる。ホルブルックの書簡には、各書簡に付された整理番号をつける。この通し番号は、アメリカン・ボードによって原史料に付されているものである。該当時期のホルブル

ック書簡（すべて佐伯によるマイクロ・フィルムからの翻刻が存在する）を全体的に把握したうえで、本稿に関するものを選び出した。神戸女学院については、便宜上、神戸和英女学校と名乗っていた時期も含めて、神戸女学院と表記する。

## 2) 神戸女学院と「ある日本化運動」

神戸女学院は、1873年、アメリカン・ボード独身女性宣教師としてはじめて来日した Eliza Talcott<sup>5</sup> (1836-1911、以下、タルカット) と Julia E. Dudley (1840-1906、以下、ダッドレー) が設けた私塾から始まった。1875年に神戸の山本通に新校舎を建てて「女学校」(Girls' School、通称“神戸ホーム”)を名乗り、旧三田藩からの支援を受けて教育を拡充した。第二代校長 Virginia Clarkson は学校の教育水準を高めて「英和女学校」と改称し、和洋両面の教育を重視した。1882年に Emily M. Brown (1858-1925、以下、ブラウン) が着任して校長となる。その翌年、Susan A. Searle (1858-1951、以下、ソール) が着任し、女性宣教師二人で相協力して教育の充実に努めることとなった。ブラウンは、同志社がカレッジとして充実されるからには女子のためのカレッジも設置するべきだと主張して、高等科を設けた<sup>6</sup>。1890年7月、京阪神地区のキリスト教主義女学校の教員たちの会議で、英和女学校の高等科を充実させてカレッジにするという意見を、大阪基督教会宮川経輝牧師<sup>7</sup>の署名を以て在日伝道団に提出した。アメリカン・ボードもこれを承諾し、中部婦人伝道会の Emily White Smith (以下、スミス) と協議して支援を行うことを決めた<sup>8</sup>。1894年、学校は校名を「神戸女学院/Kobe College」とした。開校以来、学校の生徒数は順調に増えていたが、1889年以降の生徒数は減少に転じ、1894年の入学者数は特に落ち込んでいた<sup>9</sup>。一般的にも1894年には日清戦争の影響でキリスト教主義女学校の入学志願者は減少傾向が著しくなっていた。神戸女学院年史は、その流れの中に「ある日本化運動」を位置づける。後述する若山晴子の論文もそれに従っている<sup>10</sup>。

神戸女学院『神戸女学院八十年史』(1955年、以下、『八十年史』)は、「ある日本化運動」について記述するが、章や節としての見出し化はしていない。神戸女学院『神戸女学院百年史総説』(1876年、以下、『百年史総説』)は、「学校名の改称 ソール院長代理の持久策」の章の中で、「ある日本化運動」を項目化して記述した<sup>11</sup>。神戸女学院史料室の若山晴子は、ホルブルックの書簡から、神戸女学院初年度つまり1894年を、「ある日本化運動」を含めて概観している<sup>12</sup>。若山は、このできごとについて、「内外の耳目を聳たしめ好事家たちの関心をひくような騒動を経験したことのないこの学院にとって、この秋の出来事は特筆に価することと云えよう」<sup>13</sup>と述べる。若山は、この運動は国粹主義的傾向が教会関係者の中に充満しつつあったことと結びついているとし<sup>14</sup>、女子教育に対して酷薄であったこの時期の日本の状況の中では、宣教師たちは女子の高度な教育を守るために頑なとも言える方針を貫いて日本人に渡さないという姿勢を持たざるを得なかった、とする<sup>15</sup>。ここでは、「日本人」は具体的に特定されておらず、あくまでも彼女たちのキリスト教主義女子高等教育を守るためであると強調されている。また、若山は、仙台の東華学校<sup>16</sup>の1892年3月の閉校事情が、ホルブルックに学校の政府認可の利害について考えさせる理由になったとする<sup>17</sup>。

若山の整理によると、「ある日本化運動」前後の時期は、神戸女学院からアメリカン・ボードに書簡を書き送っているのはホルブルック一人のみである。静養中のブラウンと院長代理のソールは書簡を書いていない<sup>18</sup>。『八十年史』『百年史総説』、そして若山論文は、ホルブルックの

1894 年 11 月 13 日 (416)・同月 26 日付 (417) の二書簡を参考にして記述していると考えられるが、それまでにブラウン・ソール・ホルブルックの三者が同志社関係者、とくに熊本バンドに対して抱いていた意見を、このできごとと接続させていない。

熊本バンドとは、アメリカ人教師 Leroy L. Janes<sup>19</sup> (以下、ジェーンズ) の影響を受けてキリスト教への奉教趣意書に署名したメンバーが、熊本洋学校閉校後に同志社英学校に転じた際に呼ばれた名称である。新島の死後、同志社の中の主要なポジションに就いた。本稿に名が出る宮川経輝、浮田和民、下村孝太郎、小崎弘道、海老名弾正、横井時雄、蔵原惟邦はいずれも熊本バンドのメンバーである。彼らは後年、牧師や学者として、キリスト教界において大きな役割を果たした<sup>20</sup>。

また、若山論文は、教会に対して抱いていた意見、ホルブルックのそれ以前の書簡、そして新島襄の死去後に神戸女学院の懸念材料であった資産の名義問題、ホルブルックらが日本の他のミッション・スクールの動静に絶えず気を配っていたことに対する関心が希薄である。1894 年秋、アメリカン・ボードの報告書簡の受け取り手である幹事は Nathaniel G. Clark<sup>21</sup> (以下、クラーク) から James L. Barton<sup>22</sup> (以下、パートン) に変わっている。幹事担当者が変わる中、ホルブルックは、カレッジとして歩み始めたばかりの神戸女学院を育て上げるため、その支援をアメリカン・ボード本部に促し続けなければならなかった。

## 2 ホルブルックの神戸女学院着任まで

### 1) ホルブルックについて

ホルブルックについては、石井紀子による基礎的研究<sup>23</sup> (以下、石井論文) があり、常に参考にされてきた。ほかに、来日医療宣教師の一人としての長門谷洋治<sup>24</sup>や藤本大士<sup>25</sup>による紹介、神戸女学院年史類などでの言及がある。

ホルブルックは、1854 年、アメリカのマサチューセッツ州で生まれた。地元の学校を卒業後、教師の仕事を経て同州マウント・ホリヨーク・セミナリー<sup>26</sup> (以下、マウント・ホリヨーク) に入学し、在学中に海外伝道の志を持った。1878 年、ミシガン大学医学部に入り、1880 年に M.D. の学位を取得した。半年間の研修を経験したのち、1881 年から北中国ミッションの通州に医療宣教師として赴任する。6 年間、医師として医療伝道を行い、主に貧困層女性の治療に尽力する傍ら、女性に医学や化学、生物学を教えた。しかし、コレラや腸潰瘍などを患って健康を損ない、1887 年に帰米した。

その帰米途中に日本に立ち寄り、仙台でデフォレストと会い、彼が創設に尽力した東華学校の存在を知る。このとき、日本伝道の急激な発展と、とくに女子教育の分野での大きなチャンスが到来していることを耳にした可能性が高いとされており<sup>27</sup>、クラーク宛 1887 年 10 月 10 日付プロヴィデンス発信書簡 (2) <sup>28</sup>では、仙台のカレッジで生物学を教えたいと希望を述べている。この来日の際、バックリーにも出会っている<sup>29</sup>。

帰米後、ホルブルックはマウント・ホリヨークで教鞭をとり、マウント・ホリヨークのカレッジ昇格に尽力した。そして、1889 年に学生 Cora A. Stone (以下、ストーン)、Elizabeth Wilkinson、Caroline M. Telford <sup>30</sup>とともに「日本でのマウント・ホリヨーク設立案」をアメリカン・ボードに提出するが、日本ミッションにより却下される。だが、「しっかりしたクリスチャン女性の訓練」のために働けるのであればボードの指示に従うと約束し、前述三人の学生とともに 1889 年

10月に来日した<sup>31</sup>。働きの場として初めに用意されたのは岡山で、それから鳥取英和女学校<sup>32</sup>赴任が提案された。岡山・鳥取ともに、神戸女学院創立者・タルカットが関係するところである。

ホルブルックはクラーク宛 1890年1月15日付岡山発書簡(393)<sup>33</sup>で、神戸女学院の教育水準の高さに触れ、“our Kobe School”と書く。この頃から、神戸女学院が彼女の働きの場であり、日本でのマウント・ホリヨーク実現の場であると意識していたようである。そしてこの書簡で、神戸女学院卒業生が女性であるという理由で帝国大学に入学できなかったこと<sup>34</sup>、日本には女性のための高等教育機関がないためにキリスト教主義学校の校長となる人物を育成できないこと、神戸女学院生をマウント・ホリヨークに留学させるべきであるという意見を伝え<sup>35</sup>、神戸女学院で英語教員を務めていた宮川敏(結婚後、平田敏)と鳥取英和女学校で校長を務めていた山脇花(結婚後、井深花)のマウント・ホリヨーク留学を実現させた。宮川は、幼い頃に中国で生まれたが宣教師 John T. Gulick 夫妻の養女となり<sup>36</sup>、フェリス女学院・神戸女学院で教育を受けた、神戸女学院第一回卒業生である。はじめ、Martha Gulick と名づけられていたが、宮川経輝の養女となり、長女として育てられて<sup>37</sup>宮川敏と名乗っていた。

## 2) 京都看病婦学校・同志社病院から鳥取英和女学校、神戸女学院へ

岡山から鳥取へ行く“passport”を待っていた 1890年春、ホルブルックは京都看病婦学校・同志社病院(以下、看病婦学校・病院)で短期間働くこととなった。そのことを、ホルブルックはクラーク宛同年3月22日付京都発書簡<sup>38</sup>(395)で高らかに報告している。

看病婦学校・病院は、新島襄が同志社に医学部を置くことを願って設けたものである。アメリカン・ボード医療宣教師の John C. Berry (以下、ベリー)が病院の長、Linda Richards (以下、リチャーズ)が看病婦学校の長、そしてバックリーが医師・教員として、日本人スタッフとともに運営していた。1889年年末と 1890年1月半ばに、バックリーが治療した女性患者二人が続けて亡くなった。そのうちの一人・児玉千代子は、同志社支援者の町医者・児玉精斎の娘であり、同志社病院医師の白藤信嘉<sup>39</sup>の結婚相手であった。もう一人、浮田末子は、当時同志社教員であった下村孝太郎の妹であり、同じく同志社教員であった浮田和民の妻であった。その末子の葬式の翌々日、1月23日、新島は死去した。新島死去の混乱の中で、浮田和民と児玉精斎はバックリーの治療上の過失を告発した。アメリカン・ボード京都ステーションのメンバーを中心に構成された委員会が事態を落ち着けようとしたが、浮田や下村は、周囲の同志社構成員や外部を巻き込んでバックリーの批判を続けた。バックリーは新潟にいる宣教師・Pedley の妻の看護のために京都を離れた。リチャーズも伝道活動や自分の扱いに不満が溜まっており、誤解を受けたことや体調不良を理由として京都を離れていた。その、バックリー・リチャーズが不在中、ホルブルックが二人の代わりとして手伝いに入ったのである。

ベリーはホルブルックがそのまま看病婦学校・病院にいることを望んだようだが、ホルブルックは鳥取での働きのほうが重要だと考えていたため<sup>40</sup>、移動を望んだ。タルカットが看病婦学校・病院での仕事を引き受けた。

バックリーはのちに京都に戻るが、医師として以前のように働くことはできなかった。やがて、バックリーはクラーク宛 1892年5月17日付京都発書簡で、浮田と下村、そして白藤が同志社内でトラブルを起こしたと書き、同年11月に夫とともに辞職した。このときの同志社の長は、小崎弘道<sup>41</sup>である。バックリー家族は辞職後、インドなどアジアを回ってからヨーロッパ経

由で帰米した。このとき、静養のために神戸女学院を離れたブラウンと同道している<sup>42</sup>。

ホルブルックはクラーク宛 1892 年 2 月 7 日付神戸発書簡 (404) <sup>43</sup>で、バックリーとベリーとともに鳥取英和女学校の宣教師 George M. Rowland の治療についての相談を行ったと書いているため、ホルブルックとバックリーはホルブルックの神戸女学院着任後も直接出会う機会を持っている。ホルブルックは直接書簡にバックリーのことを書かないが、同じ大学の医学部出身女性医師として、バックリーの存在を意識していたと考える。

ベリーはバックリーの擁護を続けたために次第に同志社内でも孤立し、1893 年秋、研修のため離日した際に同志社病院長のポストを失い、そのまま辞職した。同志社は、看病婦学校・病院を、熊本出身で下村孝太郎らと親しい医師・佐伯理一郎<sup>44</sup>に渡した。

京都看病婦学校のみならず、神戸女学院着任までにホルブルックが関わることを希望した、あるいは関わった学校一すなわち、仙台の東華学校、岡山の山陽英和女学校<sup>45</sup>、鳥取英和女学校は、いずれも困難に見舞われていた。

ホルブルックが鳥取英和女学校を経て、神戸女学院に着任したのは、1891 年 12 月であった。この時期、学院は、宣教師としてストーン・Abbie W. Kent・Fannie E. Griswold、日本人教員として渡辺常<sup>46</sup>・中島幸三郎を迎えていた。ホルブルックは着任の翌年から、家政・衛生・保育等の学課を設置し、担任を務めた<sup>47</sup>。以後、ホルブルックは学院の理科教育充実に努め、前述したように、学院のカレッジ化に尽力する。

1892 年秋、校長・ブラウンは体調不良のため帰米し、後に第四代院長となるソールが代理を務めていた。ホルブルックは、宣教師教員の一人として、ブラウン不在の中、ソールを支えた。

### 3 ホルブルックと「ある日本化運動」

#### 1) 神戸女学院土地所有者名義問題と同志社・熊本バンドへの警戒—ホルブルック・ブラウン・ソールの書簡—

ホルブルックは、クラークから昨年一年間についての報告を求められていたようで、その返事として 1893 年 9 月 31 日付神戸発の書簡 (407) <sup>48</sup>を認めた。この書簡の後半で、ホルブルックは土地など神戸女学院の資産について触れている。土地については日本人三人の名義になっているが、それは正当ではない<sup>49</sup>ので他の案が必要であること、同志社に譲渡して 25 年借りる形にすることもできるが、その期間後に混乱が起こるだろうということを書く。同窓会が土地を所有することについては、東京の弁護士に問い合わせ中だとし、そして、「学校は将来いつかかならず完全に日本人の手に渡るでしょう。しかしその場合でも、同志社が管理するのではなく、おそらくは同窓生が部分的に代表を務めるような別の受託組織によって管理される方がはるかによいでしょう」「私たちは、卒業生と学校の結びつきを強め、この国の女子教育の大義に何らかの高揚を与える手段となることを期待します」と書いている。ホルブルックは、同志社ではなく、神戸女学院卒業生日本人に神戸女学院を委ねることを考えていた。神戸女学院同窓会は、1892 年 6 月に創立され、渡辺常がその初代会長に就任していた<sup>50</sup>。ホルブルックはこの書簡で、第二回の同窓会総会の様子を誇らしげに語っている。また、この書簡では、マウント・ホリヨークに留学していた宮川敏が帰ってきて日本人教員の一人として加わると報告している。

この書簡で書かれる資産問題、とくに土地問題は神戸女学院宣教師たちの長年の課題であり、ブラウンとソールの書簡にもその問題がしばしば書かれる。

神戸女学院の置かれた神戸の山本通は雑居地であり、事実上の治外法権が適応される場所であったため、名目上の校長を届け出る必要はなかった。ただし、外国人は土地を所有することはできず、兵庫県では、日本人から外国人が土地を借りる場合の賃貸期限は25年と定められていた<sup>51</sup>。神戸女学院の土地は、学校設置時から新島襄死去までは新島名義で所有し、アメリカン・ボード代表の Jerome D. Davis<sup>52</sup>が賃貸する形にしていた。新島死去後は、土地の名義を新島の妻の八重に移したが、アメリカン・ボードは資産をなるべく個人の名義にしない方がよいと考えていた。同志社が新島襄名義の資産を同志社理事会の名義のものとしたために、アメリカン・ボードは神戸女学院の敷地も便宜上同志社の名前にしようとしたが、ブラウンとソールが、それでは女学院が同志社に合併されるおそれがあるとして反対していた<sup>53</sup>。前述のように、ホルブルックは同窓会が土地を所有する案を持っていたが、同窓会は土地を所有することができないという結論が出たため、1893年10月、アメリカン・ボードは、神戸女学院の土地名義を、神戸教会<sup>54</sup>の元牧師である本間重慶<sup>55</sup>、多聞教会の牧師である村上俊吉<sup>56</sup>、実業家の鈴木清<sup>57</sup>の三人に委嘱した。ただし、本間は1893年6月に神戸教会牧師を辞しており<sup>58</sup>、神戸教会の牧師には新たに海老名弾正<sup>59</sup>が就任していた。海老名弾正はかねてから神戸女学院を日本人管理に移すことを考えていた人物であった<sup>60</sup>。

ソールは、クラーク宛 1893年11月8日付神戸発書簡<sup>61</sup>で、「二週間ばかり前に同志社でありましたジェーンズ大尉の講演と、それが引き起こしました騒ぎのことは、勿論お耳に達しております。彼の同調者の一人と称される海老名氏が、わたくし共の少女たちの出席いたしません教会〔神戸教会―筆者註〕の牧師ということは、多分ご存知でいらっしやいましょう。あの方はその御来神の目的を、わたくし共の学校を占有するためと表明なさったと伝えられております」と書いている。同じ書簡に、海老名の来神は「学校内のある〔女〕教員の導きによるものでございますが、この方は海老名氏と下宿先を同じくし、氏のもの見方が『合理的で科学的で』と思われたためにすっかり心を奪われておいでのように見えます」と書かれている。この女教員の名前は、明らかにされていない。ソールは、この書簡で、神戸女学院が日本人の管理に移されなかった場合、海老名が学校の評判を落とすことができること、そしてそれによって甚だしく生徒数を減らすことを恐れている。しかし、ソールたちは、神戸女学院を決して日本人の手に渡す時ではないと感じていると述べている。

ホルブルックは1893年11月23日付神戸発書簡(409)<sup>62</sup>で、熊本バンドとジェーンズに触れている。熊本バンドは、もっとも「リベラル」で、海老名弾正曰く「宣教師の古い神学に嫌気がさして」、今や儒教・仏教・キリスト教が融合した日本の神学を打ち立てているとする。そして、彼らは権威と地位を巡って露骨に争い、同志社を支配下に置いて自分たちのキリスト教の代表にしようとしていると述べている。アメリカン・ボードが支援する横井時雄<sup>63</sup>編集の雑誌<sup>64</sup>も、孔子とブッダとキリスト教を並べているとしている。そして、キリストとブッダが平等であると説く人を解任するほどではないが、アメリカン・ボードの資金は宣教師が管理するべきだと意見を述べる。そして、熊本バンドについて言いたいことはもっとあるがやめておく、彼らは自分の思い通りにできないだろう、と書いている。

ホルブルックは、クラーク宛 1894年2月19日付神戸女学院発書簡(409)<sup>65</sup>で、神戸女学院と神戸女子伝道学校<sup>66</sup>の資産について最終的にはっきりしたことが分かった、と報告している。

鈴木清が、財産をすべて彼に渡さなければ辞任すると言い、加えてこの頃帝国議会で外国人のために財産を保有することは犯罪であるという法案が提出されていたため<sup>67</sup>、ホルブルックは財務委員会<sup>68</sup>と相談して、書類の名義を、鈴木を除いた本間・村上二人にした。この二人は、1894年3月1日から25年間、両校に土地を貸してくれることになった。ホルブルックは、本間・村上は教会の「リベラル」な動きにまったく共感していないと言う。新しい法案の下では、彼らは税金を払わなければならないが、教育機関なので税率は低くなるだろうとしている。

ブラウンはクラーク宛 1894年6月4日付ニューヘイヴン発書簡<sup>69</sup>で、このときイエール大学にいた小崎弘道と横井時雄の神学上の立場に不安を示している。この書簡は、クラークからの小崎・横井についての問いに答えたものである。ブラウンは、小崎・横井と直接土地問題や神戸女学院のカレッジ化について話したようである<sup>70</sup>。この翌日6月5日、ブラウンは、ストーンに付き添って帰米したホルブルックとデフォレストと会っている<sup>71</sup>。

ブラウンは、クラーク宛 1889年5月18日付ニューヘイヴン発書簡<sup>72</sup>の時点で、同志社が資金を集めるのに成功しているのは日本人名義のものであるからだということ、神戸女学院を同志社に譲渡することを勧められていることを書いているが、まだ日本人にこの学校を渡すべき時ではなく、ソールとともに反対していると述べている。

これらの書簡から、ブラウンとソールがともに神戸女学院を日本人の手に渡すべきではないと考えていたことがわかる。この場合、日本人というのは、ホルブルックが言うように同志社、とりわけ熊本バンドのメンバーであろう。「リベラル」な神学を是とする人々、そしてジェーンズの同志社での講演と海老名弾正の神戸教会牧師就任が、とりわけ彼女たちを警戒させていた。

## 2) ホルブルックの熊本バンド批判—1894年10月9日付神戸発書簡—

ここまでのホルブルック書簡の宛先はクラークだったが、クラークが体調を崩して引退したため、宛先は同年9月17日付のもの(414)からバートンに変わる。ホルブルックは9月中旬に日本に戻っていた<sup>73</sup>。

ホルブルックからバートン宛 1894年10月9日付神戸発書簡(415)<sup>74</sup>は、自分がアメリカン・ボードからの同志社への年間助成金について意見を変える理由を述べる、という記述から始まる<sup>75</sup>。バートンがホルブルックに同志社への年間助成金を続けるか止めるかの判断を尋ねたことに対し、ホルブルックは、助成を継続した方がいいと思うが、できるだけ圧力を強化した方がいいと答えていた。同志社のアメリカン・ボードと対立する考え方や無信仰は蔵原惟郭<sup>76</sup>やジェーンズなど同志社外の人<sup>77</sup>がもたらしめているために助成を続けた方がいいと言っていたのだが、意見を変え、助成を止めるべきだと言う。

ホルブルックは、同志社教員である浮田和民と下村孝太郎をその理由として挙げる。浮田が雑誌記事でも説教でも不可知論者だと言っていること、不信心で冒瀆的な説教をしていること、ジェーンズの来日を助けていることを述べる<sup>78</sup>。下村については、その不道徳な行動を挙げ連ねる。それから、宣教師たちが訴えた先の小崎弘道のその場しのぎの態度などについて述べる。そして、アメリカン・ボードが同志社に対して助成を止めることを“(同志社にとっての) crisis”と表現する。同志社の人たちは、日清戦争が終わり、教育への情熱が回復するまで待てば、裕福な日本人やアメリカン・ボードに属しないアメリカ人から資金を得ることができる、それから“crisis”を受け入れ、学校を手に入れようと考えている、とする。そして、今こそその“crisis”

を同志社にもたらして財政的に困難な状況にさせ、浮田・下村二人と彼らのような人々を追い出すべきだと主張している<sup>79</sup>。それは、京都ステーションのメンバーではなく、アメリカン・ボード自体が行うべきだとする。

この書簡から、ホルブルックが、下村・浮田をはじめとする同志社教員らを強く非難し、彼らの言動や態度を理由としてアメリカン・ボードに同志社への資金援助の中止を訴えていることが分かる。

### 3) ホルブルックの「ある日本化運動」報告—1894年11月13日・26日付神戸発書簡<sup>80</sup>—

ホルブルックの11月13日書簡(416)は、学校を日本人の手に渡す話から始まる。

この五・六年、外国人教員たちは様々な場面で学校を日本人に引き渡すことについて尋ねられてきたが、今、日本人の中からの院長・会計・設立者の名義人を任命してほしいという求めがあり、そうすれば、学校は行政<sup>81</sup>側に認められ、学校、教員、卒業生にとって、多くの利点があるとその人たちは言っている、という。

ホルブルックは、岡山の学校などを引き合いに出して<sup>82</sup>行政側に認められることの不利益を述べた上で、この運動を導いているのは二人の若い女性教員で、この訴えが受け入れられなかった場合、自分たちと彼女たちの間にどのような影響が出るかわからないとする。そして、彼女たちが辞職した場合のあとの仕事をどう割り振るかを心配している。そして、同志社を宣教師から引き離そうとする動きがあること、この動きの背後に何人の人物がいるのかはわからないが、海老名弾正がずっと以前に神戸女学院を宣教師の手から奪うと言った、としている。

また、この問題で一步でも譲歩するぐらいなら、生徒を残らず失う方がましだとする。それから、嘆願書を出した教員が、赤ん坊の時に命を救われ、宣教師に育てられてきたと書く。この記述から、「ある日本化運動」の主導教員二人のうち一人が、宮川敏であることがわかる。ホルブルックは、宮川がマウント・ホリヨークから帰ってきた後、“comfort”を与えてくれないと書き、最低でも宮川を解雇しなければならないとする。しかし、宮川が英語に堪能であるので、彼女の代わりを務められるのはアメリカ人以外にはおらず、新しい教員がほしいと述べている。

続く11月26日の書簡(417)では、冒頭から「ある日本化運動」の結末を報告する。ソールが、運動を主導した二教員に、「もしあなた方がこのような学校で教えるのがおいやなら、どこか別の勤め口をお探しになって結構です。また、もし学生たちがわたくし共がこれまで与えてきた教育を受けたくないとすれば、わたくし共は学校を閉めてもよろしい。けれどもあなた方の要望に譲ることは全く出来ません」<sup>83</sup>と話し、それで学校は落ち着いた、という。

そして、その年度の終わり、1895年6月に宮川は辞職した。若山がもう一人の首謀者だと推測する渡辺常<sup>84</sup>も、続いて9月に辞職した。神戸女学院同窓会誌『めぐみ』は、「帰朝後御熱心当院ノタメニ働カレ居リシ宮川姉ハ六月ヨリ渡邊姉ハ九月ヨリ執レモ御辞職ニナリ宮川姉ハ大坂川口居留地ギユリキ氏ノ宅ニテ尚ホ裁縫科御勉学中ニテ渡邊姉ハ名古屋清流女学校ニテ教授ヲ務メ居ラル 四年或ハ三年間米国ニ留学セラレシ塚本山脇雨夜ノ諸姉ハ一夏ノウチニ各々其望ヲ達シ目出度帰朝セラレシガ塚本山脇ノ両姉ハ本院教師トシテ招聘シ爾來御熱心ニ尽カセラル」と載せる<sup>85</sup>。その後には、アメリカに留学していた、塚本ふじ、山脇花、雨夜ひさが帰国し、塚本と山脇が神戸女学院教員となった<sup>86</sup>。



#### 4 おわりに

「ある日本化運動」についての報告を、院長代理のソールではなくホルブルックが書いたのは、10月9日付書簡の続きであるからか、あるいはアメリカン・ボード本部の手紙の受け取り手の変更されたために同じ人物が書き送った方がよいと考えたからか。いずれにせよ、パートンが書簡の受け取り手になってから11月の末までは、神戸女学院からはホルブルックの書簡しか受け取っていない。10月9日、11月13日、11月26日、いずれの書簡にも、パートンは返信している<sup>87</sup>。

宮川敏らの要求は、「院長・会計・設立者の名義を日本人に」ということであった。しかし、その「日本人」とは、神戸女学院宣教師たちにとっては、同志社、とりわけ熊本バンド、そして海老名弾正であった。ブラウンとソールは、「反動」時代以前から、学校を「日本人」に渡すことに反対しているが、「ある日本化運動」時点でのその理由は、ホルブルック書簡に名が出る熊本バンドメンバーの「不道徳な行動」や、彼らが唱える「リベラル」な「新神学」への危機感であった<sup>88</sup>。「ある日本化運動」は、神戸女学院の宣教師に、学校を「日本人」に渡す考えを持つ宮川敏ら日本人教員を辞めさせ、学校を「日本人」に渡すぐらいなら学校を閉じるという覚悟を決めさせるものであった。ホルブルックは、26日の書簡で、戦争とは異なる緊張感に宣教師たちがさらされていると述べる。そして、“hold still and go straight on”と何度も自分に言い聞かせなければならぬと書いている。日本人に学校を渡さないとはっきりと卒業生教員に申し渡し、卒業生教員たちを辞めさせる覚悟と、それでも神戸女学院を自分たち宣教師運営の下でやり抜かなければならぬという決意が読み取れる。

『めぐみ』1894年の号と1896年の号を見比べると、住所が神戸女学院内であった卒業生が全員院外に出ている。彼女らが高等科の生徒であったために普通科卒業後も住所が神戸女学院であったと考えられるが、宮川敏らに賛同したために卒業後、神戸女学院の教員ではなく他校の教員となる道を選んだ可能性もある。

1890年代から、多くのミッション・スクールが困難に見舞われ、閉校や方向転換を余儀なくされたことは確かである。内地雑居などが問題となり、法律が整えられるにつれ、開港地である神戸でも外国人が土地を借りる状況は厳しくなっていた。ただ、それだけではなく、神戸女学院にとっては、新島襄の死により資産名義人を失ったことが大きな危機であった。学校敷地の名義を同志社に委託するといずれトラブルが起こることが予想されていた。このときのミッション・スクールの、ノルマントン号事件の裁判への不満や条約改正問題との関係性、そして内地雑居の問題と土地問題や名義等法律的問題の詳細を明らかにすることについては、今後の課題である。また、神戸女学院が外国人宣教師による運営を貫き通すことができた理由の一つに、開港地・神戸という土地の特殊性もあると考えられるが、その解明も必要である。

「ある日本化運動」は、運動を起こした宮川敏ら日本人教員らから見た名称であり、また、このできごとを「反動」の流れの中で捉えようとしたときの名称である。神戸女学院宣教師にとっては、神戸女学院の「同志社化」が海老名弾正や宮川経輝らの影響を受けた学院内部の卒業生教員から要請されたできごとであった。1894年は、神戸女学院にとって、「新神学」を危惧する宣教師が、卒業生教員もろとも同志社との関係性を断ち切った年であったと言える。

ホルブルックは、パートンから同志社への今後の資金援助をどうしたらよいかと意見を求め

られるような存在であった。アメリカン・ボードに対して、同志社への資金援助を止めるように伝える書簡には、大きな責任が伴っていたと思われる。1895年、アメリカン・ボードは京都看病婦学校・同志社病院の問題や宣教師館の所有の問題などを議題として、同志社に特派員を派遣した。そしてその翌年、アメリカン・ボードと同志社は決裂した。特派員派遣、そしてボードと同志社の決裂には、ホルブルックの書簡が関係している可能性もある。これまでのミッション・スクールの研究は、個々の学校単位で行われてきたが、他との関わりを考慮に入れた上でそれぞれの学校史を研究する必要がある。

今後の課題として、ホルブルックら宣教師らが構想していた女子高等教育と「新神学」の関わりについて、海外の研究も含めて精読し、明らかにしていくことを挙げる。

註

<sup>1</sup> American Board of Commissioners for Foreign Missions. 米国伝道会。

<sup>2</sup> 1858-1942。ニューヨーク州生まれ。ミシガン大学医学部に入学して1884年にM.D.取得。アメリカン・ボード宣教師 Edmund Buckley と結婚し、来日。京都看病婦学校・同志社病院で医師・教員として1896年から6年間活動。詳細は拙稿「女性医療宣教師 Sara Craig Buckley の京都看病婦学校・同志社病院における活動」(『新島研究』第114号、2023年2月)。

<sup>3</sup> この批判事件の詳細については、拙稿「女性医療宣教師 Sara Craig Buckley の『過失』批判事件—京都看病婦学校・同志社病院の終わりの始まり—」(『教育史フォーラム』第17号、2022年6月)。

<sup>4</sup> 神戸女学院史料室『学院史料』掲載。ホルブルック書簡の宛先はすべてアメリカン・ボード本部。「ホルブルック書簡—印字化および註—(1)」(『学院史料』vol.30、2017年3月):1887年~1889年の26通分、「ホルブルック書簡—印字化および註—(2)」(『学院史料』Vol.31、2018年3月):1890年~1891年の10通分、「ホルブルック書簡—印字化および註—(3)」(『学院史料』Vol.32、2019年3月):1892年3通分、「ホルブルック書簡—印字化および註—(4)」(『学院史料』Vol.33、2020年3月):1893年の2通、「ホルブルック書簡—印字化および註—(5)」(『学院史料』Vol.34、2021年4月):1894年の9通、「ホルブルック書簡—印字化および註—(6)」(『学院史料』Vol.35、2022年4月):1895年の1通。底本はアメリカン・ボード宣教師文書(米国伝道会宣教師文書、「Papers of the American Board of Commissioners for Foreign Missions」(Research Publications,1893)、原本はハーバード大学ホートンライブラリー所蔵)。本稿の註ではそれぞれ佐伯「ホルブルック書簡(1)」などのように表す。

<sup>5</sup> 1836-1911。アメリカン・ボード最初の独身女性宣教師として、ダッドレーとともに神戸に赴任。1880年に神戸女学院を辞し、岡山を拠点に伝道活動を行い、1887年鳥取に鳥取英和女学校を設立。京都看病婦学校・同志社病院での活動を経て、日清戦争勃発時には広島で傷病兵の看護にあたっていた。

<sup>6</sup> 英語による研究として、Noriko Kawamura Ishii “*American Women Missionaries at Kobe College. 1873-1909: New Dimensions in Gender*” (Routledge, 2004年1月) などがある。

<sup>7</sup> 1857-1936。熊本バンドの中心人物で、海老名弾正・小崎弘道とともに組合協会の三元老の一人とされる。1882年から大阪基督教会牧師。1886年、大阪基督教会が運営する男子校・泰西学館を設立、館長となる。1893年、大阪教会を独立自給させた。

<sup>8</sup> 前掲『百年史総説』p.78-p.88。

<sup>9</sup> 前掲『八十年史』の巻末に在籍生徒類年統計が載る。神戸女学院在籍者は、1888年時点が最大で193名であったが、徐々に減り、1892年には106名、1893年には100名、1894年には72名であった。前掲『百年史総説』p.90-p.100には、「反動」期のブラウンの苦悩が書かれている。

<sup>10</sup> 後述する石井紀子論文では、それに加えて、熊本での宣教師住居売却事件や同志社女学校での明治十八年事件、同志社での理事会と宣教師の対立といった流れの中に位置づけている。

<sup>11</sup> 前掲『百年史総説』P.101。

<sup>12</sup> 『米国伝道会宣教師文書』に関する様々な報告(三)—ホルブルック書簡に見る『神戸女学院』初年度の状況—(『学院史料』Vol.16、1998年6月。以下、「若山論文」)。

<sup>13</sup> 同上、p.30。

<sup>14</sup> 同上。

<sup>15</sup> 同上、p.31。

<sup>16</sup> 1886年、仙台で開校した男子校。県・市と地元有力者たちの支援を得て新島襄とアメリカン・ボード

### 三木：宣教師 Mary Anna Holbrook と神戸女学院 1894 年「ある日本化運動」

宣教師 John.H.DeForest (1844-1911、以下、デフォレスト、娘の Charlotte B.DeForest は神戸女学院第五代院長)らが設立し、新島が初代校長となった。

<sup>17</sup> 東華学校は、地域の教育体制の変更や知事の交代を経て、諸学校通則適用のために教育課程から聖書を抹消した。聖書科目削除の時点で宣教師たちは辞意を表明しており、仙台に公立の尋常中学校が設置されたことを受けて教員の総辞職という事件も起きていた。新島の死後、副校長の市原盛宏がイエール大学に留学している間の閉校であった。(田中智子『近代日本高等教育体制の黎明—交錯する地域と国とキリスト教—』思文閣出版、2012、p.384-p.389)

<sup>18</sup> 前掲若山論文 p.44 にホルブルック、ブラウン、ソールの書簡の差出人一覧がある。

<sup>19</sup> 1838-1909。アメリカの陸軍大尉。熊本洋学校、大阪英語学校の教員を経て帰国。熊本バンドメンバーの勧めで再来日、京都第三高等学校、鹿児島尋常中学校造士館で英語を教える。

<sup>20</sup> 熊本バンドについては、同志社大学人文科学研究部編『熊本バンド研究—日本プロテスタンティズムの源流と展開—』みすず書房、1965 など多数の研究がある。

<sup>21</sup> 1825-1896。アメリカン・ボード Corresponding Secretaries の一人。在任 1865-1894。

<sup>22</sup> アメリカン・ボードの外国通信部の一人。東トルコ伝道団で活動ののち、クラークの後任となった。

<sup>23</sup> 「アメリカ女性医療宣教師の中国伝道：メアリ・アナ・ホルブルックの場合(一八八一〜一九〇七年)」(『日本研究：国際日本文化研究センター紀要』2005年3月)、以下、石井論文。

<sup>24</sup> 長門谷洋治「近代日本における外人宣教師の研究」(『日本医史学雑誌』第16巻第1号、1970年4月)

<sup>25</sup> 藤本大士「1880-1890年代の日本におけるアメリカ女性医療宣教師の活動」(『日本医史学雑誌』第64巻第3号、2018年9月)

<sup>26</sup> Mount Holyoke Seminary。1837年、Mary M. Lyonにより創立。ホルブルックらの運動により1888年にMount Holyoke Seminary and Collegeと名乗り、1893年からMount Holyoke Collegeとなった。詳細は小椋山ルイ「19世紀女子高等教育における宗教と科学—マウントホリヨークの事例—」(関東学院大学経済学部総合学術論叢『自然・人間・社会』第20号、1996年1月)。

<sup>27</sup> 前掲石井論文 p.178。

<sup>28</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(1)」。

<sup>29</sup> バックリーからクラーク宛 1889年6月20日付京都発書簡。

<sup>30</sup> Wilkinsonは1892年、ストーンは1893年、いずれも体調不良のために帰米。Telfordは癌のため、余命2、3か月であろうと医者が言っているとホルブルックはクラーク宛 1894年2月19日付神戸発書簡で述べている(佐伯「ホルブルック書簡(5)」)。

<sup>31</sup> 前掲石井論文 p.177-p.178。

<sup>32</sup> 1887年、タルカットにより創立。生徒数が集まらなかったこと、公の支援を受けた鳥取女学校が作られたこと、経済的困難と教員不足により、1902年に閉校。(近藤十郎「鳥取英和女学校と同志社」同志社女子大学史料室、2011年3月)

<sup>33</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(2)」。

<sup>34</sup> ホルブルック 1890年1月15日岡山発書簡、佐伯「ホルブルック書簡(2)」。戸川小鹿(結婚後、安田小鹿、改名して安田靖子)と香坂虎子(結婚後、水野虎子)か(「帝国大学及高等中学へ入学を乞はるゝ女子は〔中略〕神戸の女学校を卒業ありたる香坂とら子(当今頌栄女学校の教師)同卒業生戸川小鹿子(当今明治女学校の教員)等にて尚ほ其外にも同様の志望をいたかるゝ人数多ありときゝぬ)』『女学雑誌』第42号、p.93、1886年11月25日)。戸川小鹿はホルブルックが鳥取に行った際に随行している(『めぐみ』第58号、1914年8月、p.23)。

<sup>35</sup> このホルブルック書簡により、クラークは、留学よりも、神戸女学院をカレッジにした方がよいと考えたとされる。(前掲石井論文 p.179)

<sup>36</sup> アディソン・ギュリック編著 渡辺正雄・榎本恵美子訳『貝と十字架—進化論者宣教師 J.T.ギュリックの生涯—』(東西交流叢書5、雄松堂出版、1988、原著 Addison Gulick“*Evolutionist and Missionary JOHN THOMAS GULICK Portrayed through Documents and Discussions*” The University of Chicago Press, Chicago, Illinois, 1932) p.267-p.268 に、宮川敏のことが記載されている。

<sup>37</sup> 高橋虔『宮川経輝』大空社、1996、(原著は比叡書房、1957) p.177。

<sup>38</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(2)」。

<sup>39</sup> 1861-1932。児玉信嘉とも。長州藩儒医の子。ミシガン大学医学部でバックリーの同級生として学んだのち、エディンバラ大学医学部を経て同志社病院医師となる。下村孝太郎が同志社で設けたハリス理化学校の教員にもなった。

<sup>40</sup> ホルブルックからクラーク宛 1890年4月23日付京都発書簡。佐伯「ホルブルック書簡(2)」。

<sup>41</sup> 1856-1938。牧師。東京キリスト教青年会(YMCA)の創立者の一人、初代会長。キリスト教青年会機関紙『六合雑誌』、週刊新聞『基督教新聞』を刊行。新島襄死去後、同志社社長。1893年、シカゴでの世

界宗教大会での講演が宣教師から批判された。その講演後、8か月間イエール大学で神学を研究した。同志社社長在任中に同志社がアメリカン・ボードと決裂し、学内混乱の責任を取る形で退任した。

<sup>42</sup> 「おそらく、バックレー氏ご一家も私どもと一緒でしょう」(ブラウンからクラーク宛 1892年9月15日付神戸発書簡、西尾光子・寺西裕加恵「ブラウン書簡一訳および註(七)」(『学院史料』vol.13、1995年3月)、p.12)・「また、二等の旅は殊に四人連れならば(バックレー氏のご一家が行を共にして下さいますから)、全く安全であるという証拠がたくさんございます」(ブラウンからクラーク宛 1892年10月20日付神戸発書簡、同上 p.13・p.14)。

<sup>43</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(3)」。

<sup>44</sup> 1862-1953。熊本出身。熊本医学校、帝国大学、海軍、ペンシルヴァニア大学、ミュンヘン大学などを経て1891年夏から京都看病婦学校・病院で医師として勤めた産科医。若松兎三郎『下村先生追憶録』(1938)に、下村孝太郎の追悼文を寄せ、下村と非常に親しかったと書いている。

<sup>45</sup> 1886年に石黒涵一郎が岡山市に設置した女学校。1890年、生徒数減少と校舎建設費の負債で財政難が深刻になり、1892年に山陽女学校と改称して良妻賢母主義教育へと転換。1894年、再び財政危機に陥り、募金や生徒募集に奔走した。(山陽学園編『山陽学園百年史』山陽学園、1986)

<sup>46</sup> 第一回卒業生。1883年から1887年まで神戸女学院教員を務めたのち、ブラウンが Carlton College に留学させる。神戸女学院同窓会初代会長。1890年より再び神戸女学院教員。

<sup>47</sup> 「本院の小歴史」『めぐみ』第12号、1895年12月、p.17。

<sup>48</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(4)」。

<sup>49</sup> “This form [建物はアメリカン・ボード所有で土地は三人の日本人名義の所有であること] is not legal and is not very secure and some other plan must be desired.”とある。(佐伯「ホルブルック書簡(4)」)

<sup>50</sup> 前掲『百年史総説』p.93。なお、『めぐみ』は、それ以前から発行されていた文集が、改めて同窓会誌として発行されたもの。

<sup>51</sup> 1876年4月12日の兵庫県で定めた地家貸渡規則第二条で、外国人への貸渡期限は25年以内とされ、1884年11月28日改正の地家貸渡規則第二条でも同様に期限は25年と定められていた。税金について、家屋等は日本人所持の場合と同じ税率で納めさせ、1888年以降は定額を借地料に包含して納めさせることになっていたが、外国人所有の形にして税金の軽減を図るなどの例があったために1893年12月28日付で兵庫県支部会議長より兵庫県知事宛てに税金の見直しについて建議がなされ、内務省・外務省にも伺いが出されていた。(大山梓『旧条約下における開市開港の研究』鳳書房、1967、p.109-128) 神戸女学院の山本通の土地所有の変遷については、「志摩三商会に着目した近代神戸の都市形成に関する研究」(水島あかね代表、科学研究費助成事業研究成果報告書、2017年6月)で旧土地台帳をもとに書かれている。

<sup>52</sup> 1838-1910。新島襄らと協力して同志社を設置したアメリカン・ボード宣教師。

<sup>53</sup> 前掲『百年史総説』p.108。学校敷地以外の宣教師館などはすでに同志社名義になっており、学校敷地のみが同志社名義になっていなかった。

<sup>54</sup> 1874年4月に、アメリカン・ボード宣教師 Daniel.C.Green が作った摂津第一公会を起源とする教会で、神戸女学院の母教会。当時の教職員や在校生が教会在籍者の半分以上を占め、密接な関係があった。

<sup>55</sup> 1856-1933。伊勢士族の子。同志社英学校最初の学生。1891年から神戸教会牧師。

<sup>56</sup> 1847-1916。小田原藩医の子で、三田藩医の養子となる。キリスト教週刊新聞『七一雑報』創刊者。

<sup>57</sup> 1848-1915。旧三田藩士。摂津第一公会(神戸教会)設置者の一人。実業家。赤心社初代社長。新島襄の支配人。

<sup>58</sup> 渡辺常吉『海老名弾正先生』大空社、1992(原著は龍吟社、1938) p.213に本間重慶辞任のいきさつが載る。

<sup>59</sup> 1856-1937。1890年日本基督教伝道会社の社長に就任し、アメリカから財政・神学的独立のために尽力したとされる。

<sup>60</sup> 前掲『百年史総説』p.108-p.110。ソールは、1893年11月2日付スミス宛神戸発書簡で、熊本バンドのメンバーが編み出した新しい「神学」への懸念、一週間前にジェーンズが同志社チャペルでの講演で福音的キリスト教を批判したことへの批判、神戸教会の牧師・海老名弾正がジェーンズと意見を全く一にしていることへの不安などを述べている。また、海老名が神戸女学院で行った説教内容が学内に動揺をもたらしていること、同窓会は婦人団体であるために土地を所有できないと東京の弁護士から返事があったこと、海老名が神戸女学院を占有するために神戸にやって来たことと聞いたと書いている。(若山晴子「ソール書簡一訳および註(五)」(『学院史料』vol.14、) p.32-p.40)

<sup>61</sup> 若山晴子「ソール書簡一訳および註(五)」(『学院史料』vol.14) p.40-p.43。訳文は若山による。

<sup>62</sup> 佐伯「ホルブルック書簡(4)」

<sup>63</sup> 1857-1927。儒学者・横井小楠の子。牧師。1894年から2年間イエール大学に留学。1897年4月、小崎弘道の後を受けて同志社社長に就任。

- 64 ‘Christian’ (佐伯「ホルブルック書簡(4)」)。
- 65 佐伯「ホルブルック書簡(5)」
- 66 ダッドレーと Martha J. Barrows が 1880 年に神戸に設けたバイブル・ウーマンを育成するための学校。神戸女学院とともにアメリカン・ボード神戸ステーションに属した。
- 67 この法案が具体的に何を指すのかは特定できなかった。
- 68 “property committee”。神戸ステーションの財務委員会か。
- 69 西尾光子・寺西裕加恵「ブラウン書簡一訳および註(九)」『学院史料』vol.15) p.13-16。
- 70 クラーク宛 1893 年 11 月 16 日付ニューヘイブン発書簡、西尾光子・寺西裕加恵「ブラウン書簡一訳および註(八)」『学院史料』vol.14) p.13-p.15。
- 71 クラーク宛 1894 年 5 月 26 日付ニューヘイブン発書簡、西尾光子・寺西裕加恵「ブラウン書簡一訳および註(九)」『学院史料』vol.15、p.10-p.11・クラーク宛ニューヘイブン発 1894 年 6 月 5 日付書簡、同、p.16-p.17。ホルブルックは体調不良のストーンに付き添って帰米していた。この帰米時、ホルブルックはクラークにも会ったようである。(ブラウンからクラーク宛 1894 年 5 月 18 日付ニューヘイブン発書簡、同上 p.10-p.11)
- 72 石村真紀・西尾光子・寺西裕加恵「ブラウン書簡一訳および註(四)」『学院史料』vol.10、1992 年 3 月) p.4-p.7。
- 73 『めぐみ』第 10 号、1895 年 12 月、p.21。
- 74 佐伯「ホルブルック書簡(5)」
- 75 日本伝道団第 22 回年次総会(1894 年 7 月 5 日～12 日、神戸)議事録によれば、同志社はあるべき状態にはないが、まだ希望があるとして、通常通り予算を申請すると決議された。1894 年の同志社と関連機関への予算は 4,500 ドルとなっている。(佐伯「ホルブルック書簡(5)」註)。
- 76 1861-1949。このとき熊本英学校・熊本女学校校長。
- 77 “outside of Doshisha”(佐伯「ホルブルック書簡(5)」)
- 78 浮田は、『六合雑誌』で、明治 20 年代から宗教批判を繰り返し、たとえば 1892 年 9 月第 141 号では「基督教の本領」と題してキリスト教やアメリカン・ボード宣教師批判を行っていた。また、1894 年 8 月第 164 号「外国宣教師論」では宣教師を痛く批判した。浮田の論は、学問を停滞させ、文明を害する宗教は不要だというもので、外国人宣教師の活動をそのようなものと認めるものであった。浮田は宗教批判論が理由で 1897 年に同志社辞職を止むなくされた。(尾崎ムゲン『六合雑誌』における浮田和民の理論活動について(同志社大学人文科学研究所『六合雑誌』の研究)教文館、1984)
- 79 佐伯「ホルブルック書簡(5)」。
- 80 同上。
- 81 “government”。前掲石井論文は文部省とする(p.182)が、具体的には所轄庁である兵庫県だろう。
- 82 山陽女学校。1886 年、山陽英和女学校として石黒涵一郎が創立。ホルブルックのこの書簡によると、カリキュラム変更の際、行政から、聖書を持つことに異議を唱えられて屈せざるを得なかったという。
- 83 前掲若山論文の若山による訳出、p.33。
- 84 前掲若山論文、p.38。
- 85 『めぐみ』第 12 号、1896 年 12 月、p.11。
- 86 塚本ふじは第四回卒業生。神戸女学院教師兼高等科生徒を経て、ウィルソン大学及びペンシルヴァニア大学大学院で生物を学んだ。山脇花は、神戸女学院第六回生で、鳥取英和女学校に勤めたのち、マウント・ホリヨークに留学して数学と自然科学を学んだ。ホルブルックとは鳥取英和女学校で出会い、ホルブルックからマウント・ホリヨーク留学を勧められている。雨夜ひさは第二回生で、卒業後に神戸女学院教員を経て第一回高等科を卒業し、カールトン・カレッジに留学したが、帰国後早逝した。(以上、岡本道雄「近代日本の女子教育と神戸女学院一婦人宣教師の教育活動とその影響について」(神戸女学院『神戸女学院百年史各論』1981 年)の初期卒業生説明より)。
- 87 ホルブルック書簡末尾に返信したことが記されているのみで、内容は不明。
- 88 「新神学」については、古くは高道基「熊本バンドの国家主義的傾向—教育勅語」周辺における—(同志社大学人文科学研究所第二研究(キリスト教社会問題研究会)『キリスト教社会問題研究』第 7 号、1963 年 4 月)、最近のものでは古賀敬太「内村鑑三とその時代(3)一民権と国権の相克—(大阪国際大学紀要『国際研究論叢』第 35 号第 3 巻、2022 年 3 月)などがあるが、1890 年代前半についての研究は少なく、本稿はその 1890 年代前半の「新神学」をめぐる状況を明らかにしたとも言える。

(教育哲学・教育史学コース 博士後期課程 2 回生)

(受稿 2023 年 8 月 31 日、改稿 2023 年 11 月 20 日、受理 2023 年 12 月 21 日)

## 宣教師 Mary Anna Holbrook と神戸女学院 1894 年「ある日本化運動」

－同志社との緊張関係を踏まえて－

三木 恵里子

日清戦争勃発後の 1894 年 11 月、アメリカン・ボード支援下で宣教師が運営する神戸女学院で、日本人教員有志が校長・会計・設立者の名義を日本人にせよという要請をした。神戸女学院の年史と先行研究は、このできごとを「ある日本化運動」と名付け、国家主義・国粋主義の台頭などキリスト教への「反動」の時代の流れを象徴するものとして捉えた。本稿では、主に神戸女学院教員宣教師である Mary Anna Holbrook がアメリカン・ボード本部に書き送った報告書簡を用いて、「ある日本化運動」以前から神戸女学院宣教師が熊本バンドメンバー率いる同志社を批判しており、「新神学」を唱える彼らに神戸女学院を譲ることを是とせず、宣教師らのみによる女子高等教育の実現を続けることを決意させたできごとであったことを明らかにした。

## Missionary Mary Anna Holbrook and “A Japanization Movement” in Kobe College, 1894: Based on the Tension with Doshisha

MIKI Eriko

In November 1894, after the outbreak of the Sino-Japanese War, Japanese teachers at Kobe College, which was run by missionaries under the auspices of the American Board, requested that the principal, treasurer, and founder be named Japanese. The previous studies have named this event “a Japanization movement” and viewed it as symbolic of the current “reaction” against Christianity, including the rise of nationalism. This paper mainly uses a letter written by Mary Anna Holbrook, a missionary of Kobe College, to the American Board. It showed that even before the “a Japanization movement”, Kobe College missionaries had criticized Doshisha led by Kumamoto Band members, and the woman missionaries couldn’t allow to give Kobe College to the Band who advocated a “new theology”. The letters also revealed that they had been critical of Doshisha, led by the Band, even before the “a certain Japanization movement”.

キーワード：神戸女学院、同志社、ミッション・スクール、メアリ・アナ・ホルブルック

Keywords: Kobe College, Doshisha, Mission School, Mary Anna Holbrook